

天が託した役割を胸に、各人が未来を紡ぐ

会長 近藤 英治

新しい年の始まりを告げる鐘の音が、夜空に余韻を残して響き渡ります。今年、近くのお寺で除夜の鐘を撞きながら、新たな一年を迎えました。心の中でさまざまな願いを唱える年越しの瞬間は、時間の儚さや重みについて考えるよい機会です。年齢を重ねるにつれ、時間が加速度的に過ぎていくように感じるのは、私が有限の時間を意識し始めているからかもしれません。子どもが成長し、親が老いる姿を目の当たりにする中で、残された時間で自分が成すべきことは何かと思いを巡らせることが増えました。佐藤一斎の『言志録』にある「天、何の故にか我が身を生出（うみいだ）し、我れをして果して何の用にか供（きょう）せしむる」という言葉は、道に迷う全ての人の道標となることでしょう。



年の瀬も押し迫るある日、安政橋の袂にある法泉寺で教室恒例の追悼法要が行われました。その僧侶の説法がなぜか今も心に残っています。「多くの方は神仏に願いを託すが、実は私たち自身が神仏から何かを願われているのだ」という逆説的な教えです。この言葉を聞いてすぐには理解できなかったのですが、「人は互いに補い合い、支え合って生きる存在である」ということなのだろうと不思議と納得しました。現代では、まず自分の幸せを追求することが推奨される傾向にありますが、果たしてそれで本当に幸せを得ることができるでしょうか。自分のためだけでなく人や社会のために自分は何ができるかを考え行動することで、周囲に自然と幸せの土壌が形成されます。そしてそれが巡り巡って自分もまたその恩恵を受けるのではないのでしょうか。もちろん、自分が何をすべきか迷うこともあるでしょう。それでも目の前のことに丁寧に向き合い、少しずつでも挑戦を続けることで、すべての経験が未来の自分を形作る大切な一歩となります。課題や役割が重荷に感じられる瞬間にも、楽しむ心を忘れず挑めば、それが自らの成長の糧となり、ひいては周囲に活力をもたらすのです。

今年も、教室や同門の仲間とともに互いに支え合い、成長を喜び合える組織を築いていきましょう。それぞれが天から託された役割を果たし、さらに多くの人が集う教室を目指し、力を合わせて進んでまいりましょう。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

(2025年 睦月)